

「プロジェクトに関する専門知識とスキル教育： アドバイザーの関わり方について」が開催されました

実施報告

日時: 2010年10月29日(金) 17:15 ~ 18:30

場所: 東海大学湘南キャンパス 8号館3階 プロジェクト会議室

司会: 尾崎 由佳(チャレンジセンター専任講師)

- 内容:**
1. キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)における平塚ビーチハウスプロジェクトの取り組みについて
(アドバイザー 杉本 洋文(工学部建築学科 教授))
 2. Tokai International Communication Club(TICC)における取り組みについて
(アドバイザー 森山美紀子(外国語教育センター 准教授))
 3. ディスカッション



1. キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)における 平塚ビーチハウスプロジェクトの取り組みについて

杉本 洋文(工学部建築学科 教授)

ビーチハウスプロジェクトは、市民・学生・行政の3者の協働によって「湘南ひらつか」の魅力を再発見することを目的としている。毎年、学生が主体的にコンセプトを決めて、ビーチハウスのデザインおよび製作を行っている。今年のデザインコンセプトは「珊瑚ドーム」であった。アドバイザーとして指導をする際には、以下の3つを目標としている。

1. 専門の知識と論理的に考える能力を身につける
2. 生きた「情報」と直にふれる「場」を用意する
3. 社会人基礎力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を学生に体得させる



また、日ごろの指導で心掛けていることとして、以下の点が挙げられる。

1. 学生は社会人として扱う
2. ホウレンソウ(報告・連絡・相談)の約束
3. 本番に向けてたくさんの失敗を経験させる
4. プロジェクトを社会に開き、多くの接点をつくる
5. 上下をつくらないフラットな関係づくり
6. 学生一人一人の個性を活かす
7. 能力の差を補い合うチームワークづくり
8. 問題解決は全員で
9. 成果や感動は共有する

【質疑応答】

- Q メンバーが集まる時間はどのようにして調整しているのか？
- A (杉本) 定例会の時間が決まっている。学年ごとに集まることができる時間が違うことや、進行に応じて臨時の集まりが必要になることもあるので、随時、時間調整をすることもある。
- Q 作業場はどうやって確保しているのか？
- A (杉本) 空いた研究室を使って作業場を設けている。作業場には情報をストックするファイルを作ったり、壁一面に大きな工程表を貼ったりして情報共有を促進している。
- Q デザイン学科以外の学生や、C. A. P. の他チームを巻き込むために、どのようなことを心がけているのか？
- A (杉本) C. A. P. 内の3チームの連携については、確かに十分ではないという認識を持っている。しかし、それよりも学外団体との協働や交渉をする場面での難しさを感じている。解決策として、ビーチハウスプロジェクトは運営期間が1カ月間と長く、3チームが協力しないと活動が滞ってしまうため、プロジェクトを通して連携を深めるような指導を心がけている。

2. Tokai International Communication Club (TICC) における取り組みについて

森山美紀子(外国語教育センター 准教授)

本プロジェクトは、大学周辺地域に住む外国人や留学生との交流を通して社会貢献・国際貢献を行っている。プロジェクトが発足してから3年目までは活動がうまくいかず、学生間の関係や、学生とコーディネーター及びアドバイザーとの関係も満足のものではなかった。しかし、発足から4年目を迎えた本年度は、ビジョンを持ったリーダーが現れるなど、メンバーが楽しく参加できる環境が整ってきた。



アドバイザーとして特に専門知識やスキルが必要とされるわけではないため、学生とはコーディネーターと同様な関わり方となっている。指導をする上では、幹部メンバーとできるだけ頻繁に連絡を取り合うように心がけている。また、学生の自主性を重んじるため、教員が指示を出しすぎないように留意している。

チャレンジセンターに対する要望としては、活動の性質によって、大会成績など成果が見えやすいプロジェクトもあれば、成果が見えにくいプロジェクトもあることに配慮して欲しい。例えば、年間を通してプロジェクト活動を計画通りに成し遂げることができるだけでも、大きな成果であると思われる。また、活動内容によっては少人数の方が効果的な場合もあるため、メンバーの数についても柔軟に考慮してほしい。なお、一昨年まで開催されていたアドバイザーミーティングを再開し、アドバイザー同士が意見交換できる場を設けて欲しい。

【質疑応答】

Q 「成果を挙げることを求める」という点について、どのようなところに問題を感じたのかを教えてください。

A (森山) 今年度の審査で、TICCはチャレンジプロジェクトには採択されず、ユニークプロジェクトとして活動している。審査の際に、開催時期の関係で記入できなかったシンポジウムやセミナーの成果が伝わらなかったこともその理由の一つではないかと推測しているが、審査結果の理由をより分かりやすく示していただくとともに、見えにくい成果についても積極的に評価していただきたい。

(センター関係者) 審査結果の理由をより分かりやすく示すようにしたい。

(杉本) 大会やコンテストなどが少ないボランティア系活動の成果を客観的に示すために、支援対象となった団体や、イベントに参加した市民のリアクションを記録してみてもどうか。活動を高く評価してくれていることが可視化されるとともに、学生の励みにもなると思う。また、市長や教育委員会に対し、活動証明書のようなものを依頼することも有効だと思う。

3. ディスカッション

- ・アドバイザーは何をすべきか。コーディネーター業務と重なっている部分もある。学生に任せられるところは任せてもよいが、「ダメ」とブレーキをかける役割を担っていると思う。もうひとつは「相手からどう見えるか」という点。広報や申請書作成など、外から見たときにどう評価されるか、どのような反応を得られるかについての理解が、学生に共通する弱い部分なので、客観的にアドバイスすることも重要。成果ばかりではなくプロセスに価値があるというのであれば、どうすればプロセスが見えるようになるか、評価されるようになるかを指導することが大切なのでは。そのあたりについて、学生に知恵をつけてあげること、学生の気がつかないことをアドバイスすることが大切ではないかと思う。
- ・アドバイザーは孤立無援になりがち。大きなチャレンジをさせてあげると学生の自信もつき、やる気もあがる。そのように導いてあげることがアドバイザーのできることなのでは。これまでアドバイザーに任せきりの状態になっていたが、アドバイザーミーティングなどフォーマルな形での話し合いばかりではなく、よりインフォーマルな形での集まりを開いて情報共有してはどうか。
- ・コーディネーターの中間研修会で、アドバイザーとの連携をより緊密にして学生支援をしたいという声が多数聞かれた。どうしたらアドバイザーと問題や情報を共有できるのかという悩みが多いことが明らかになった。年度末にアドバイザーとコーディネーターを対象とする情報共有の場を企画したい。
- ・ファシリテーションなど同じノウハウを共有することによって、アドバイザーやコーディネーターがうまく連携できるようになるのでは。会議ではなくワークショップを開いて、同じ体験を共有することが必要だと思う。同じ経験、同じ興味関心を共有して、共通のグラウンドを持つことを日ごろから心がけることが大切だろう。

最後に司会者から、今回の研究会の総括として、アドバイザーがプロジェクト活動の支援に関わっていくにあたり、チャレンジセンターの支援体制をより充実させていくとともに、コーディネーターとの連携やアドバイザー同士の協力を促進する環境づくりが重要になるだろうという展望が述べられた。